

## 助成活動実績報告書

企画名	永江川河口湿地の形成と現状から、今後の保全のあり方を検証する
団体名	NPO 法人岡山淡水魚研究会

### ①活動の目的について

日本の重要湿地 500「永江川河口湿地」の保全のあり方を検討するための基本資料作成

### ②内容について（学習会、集会などは開催日や内容、参加者数など。設備・物品購入などの発注、納品、竣工、支払いなどの案件に関わる事実の掲載）

1. 資料から、湿地形成の概略を分析。
2. 現在の湿地の状況を生物個体数調査によって把握。
3. 研究報告としてまとめた干潟の無脊椎生物相と変遷の記録を上空写真と照合させて記録。
4. 調査の内容を写真展示等によって報告。

### ③この活動によって達成された成果

古地図及び文献調査から、永江川河口湿地は 1684 年から現在にかけて形成されたものであること、近年完成した堤防によって、歴史的意義をもつと考えられる石積み護岸が検証されることなく撤去されていたことが明らかになった。

また、当該湿地に棲息する絶滅危惧種のうち、分布条件が限定的であるシオマネキの分布域および個体数を調査した。当該湿地ではシオマネキが確認できる裸地周辺にオカミミガイ、ヒラドカワザンショウが分布するヨシ群があることを意味する。干潮時（宇野港潮位 30cm～80cm）および満潮時（同 130～180cm）それぞれの上空写真とこれらの生物分布から、当該湿地の地盤高が把握できた。干潟後背湿地内の標高の 30cm～80cm の変化が生物分布に影響していることが考えられるため、今後、生物相の変化が生じた場合に、地形変化（水位、流速、懸濁物、塩分由来の堆積物の異変）およびこれに先立って実施した土質調査データと合わせて、原因を検討するための貴重な資料になる。

なお、本助成によって実現したものは上空写真の撮影のみであるが、自己資金によって報文二編を出させていただいた（倉敷市立自然史博物館研究報告第 26 号）。

### ④今後の計画・展望について

地元町内の聞き取りにより、ヨシ堤防が減少していることが心配される。この現状把握をすることと対策を講じる必要がある。なお、2012 年度は、福武財団による助成によって、永江川河口湿地と同様に児島湾締め切り堤塘建設以前の干潟環境の痕跡がある干潟を探すとともに、当該湿地を含めた現在の児島湾の歴史／変遷についての資料を整理する。

⑤写真等参考資料添付



Fig.1



Fig.2

永江川河口湿地の生物多様性を特徴づけている要素であるシオマネキ (Fig.2 左) とオカミミガイ (Fig.2 右) の棲息環境に着目した。シオマネキは 2002 年に一頭が確認されて以降の報告がされていなかった。今回の調査で双眼鏡による計数と分布地点を確認により、個体数の増加と分布域の拡大は明らかである (Fig.3 左)。稚ガニも含め、個体サイズのばらつきも観察されるため、良好な棲息環境を保有していると考えられる。これらの地上観察地点は、潮位が異なる二回の航空写真によって、ヨシ原湿地内の起伏 (冠水) が棲息環境の条件であることがわかる (Fig.1 および Fig.3 右)。当該湿地の生物相および分布域の変化をこれらの微地形を維持することは保全の上で重要である。

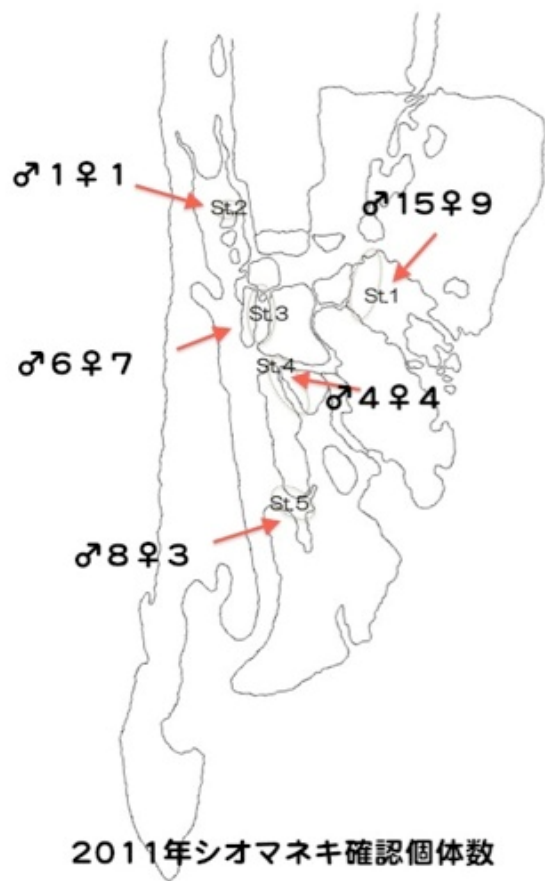


Fig.3